

Title	スペイン語における叙法と法性
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 56 p.1-p.16
Issue Date	1982-03-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80878">https://hdl.handle.net/11094/80878</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# スペイン語における叙法と法性

出口 厚 実

## Modal concepts in Spanish infinitives

Atsumi DEGUCHI

It is our desire to examine the validity of some proposals made on this topic in Deguchi 1980 a, b, 1981 a, b, and gain greater insights into the problem.

This paper consists of two parts. In § 1 we are concerned with the definition of some fundamental terms needed for any discussion of so-called ‘mood’ and ‘modality’. Specifically it deals with the expression “the attitudes of the speaker” found in most grammars, which we think must be defined anew with more precision.

§ 2 presents a frequency count concerning modalities both in finite clauses and in infinitives, and it is then shown that the modal concept underlying structures with infinitive has a striking tendency to be non-indicative. We argue that infinitival complements should not be considered neutral or transparent with respect to modality, and that it is preconditioned to have an ‘affinity’ for non-indicative moods, i.e. Subjunctive and Presumptive. This analysis provides a natural way of accounting some independent uses of Spanish infinitive.

### I

スペイン語文法に限らず、「叙法」は時には法マーカーを、時には法概念を指すべく混然と用いられることが珍しくない。ある動詞語形が直説法形であるか、接続法形であるか、あるいは第3の独立したカテゴリーに属すかの問題は、「法」「叙法」などの用語を正確に規定した上で取り組まないと論議は空回りを重ねるだけである。「法」が話題になる時、よく持ち出される“話者の態度”という曖昧な言い方も更に吟味を加える必要があらう。

第1章では拙稿(1980 a, b; 1981a,b)を踏まえ、叙法と法の関係をより深く理解するための出発点として、「叙法・法・法性」や「話者・態度」の実質を出来るだけ明確にしようと試みる。

## 1. 叙法・法・法性

命題を表現しようとする過程で、話者はその命題の真偽性に関して何らかの pragmatic な評価を与えるものと仮定する。それは話者の経験や実世界についての知識、聞き手などを考慮に入れた、言語使用の現前場面に強く感応した判断である。発話者が文又は節の形で外在化する命題には、自らが提示する命題だけではなく、非話者つまり他者に由来するものも含まれる。文形成の背面に潜むこのような命題真偽についての判断内容を「法(概念)」と呼ぶ。法は実に様々な記号で具現され得るが、法を部分的にせよ表わしている統語・語彙・形態・音韻の実現をすべて「法表現」とみなす。従来、“法”の議論は殆ど例外なく、法表現のごく一部に過ぎない動詞法形態素に集中している観があるが、法(助)動詞、法副詞、法形容詞、法名詞、法前置詞 etc, 法概念を含むあらゆる文法範疇を関連づけ、より高い視点から法をとらえ直す必要があるのではないかと思われる。法判断が一定の文法範疇内部で組織的な対立価を示すとき、「法値」を持つと言い、法値の総体系とその相互関係を「叙法」と呼ぶ。スペイン語動詞は内蔵する接辞形態素のおかげで、3つの法値＝直説法(IND)、推定法(PRES)<sup>1)</sup>、接続法(SUBJ)から成る叙法を持つ。法概念が文法形式の上に明確な区切りをもって投影されるとき、その範疇化を「法範疇」とみなす。筆者はスペイン語の述語に6段階の法カテゴリーを認めたいと思う[cf. 後出 I, 3. (12)]。「法性」は法概念、法範疇、法実現の cover term であり、法 marker と無縁の言語形式にも「法性」の有無や多寡を云々することができる。従って、この語の用い方は、文の非命題的部分を漠然と指す文の成分としての“modality”とは全く異なるものである。愚見によれば、文や節だけでなく、語や形態素もそれが法概念に結びつく限り、ある種の法性が反映されている。

## 2. 命題の真偽

ここで言う“真偽”は与えられた(真偽判定可能な)命題に真理値を指定したり推論する論理操作を意味しない。言語化の対象となり得るあらゆる事象の各々(＝命題)に対し、命題(P)の提示者はPがそうであるか、そうでないのか、その中間位であるかなど、多値的な認識をもつ。Pの真実性の評価は個人の純粋な思惟ではなく、語用論上の多くの因子を包み込み、融和させた複合包括的な判断である。

- (1) a. “Pが真である”ことの認識の確度
- b. “Pが真である”確率
- c. “Pが真である”ことを表出する直接性の度合
- d. “Pが真である” $t_1$ と基準時 $t_0$ との隔たり ( $t_1 > t_0$ )
- e. “Pが真である”可能世界 $W_1$ と現実世界 $W_R$ との観念的距離

法(概念)は上記基準のいずれかの単一特性の濃淡で決まることは少なく、大抵いくつかの評価を組み合せ、斟酌した結果、生まれる。(1a)は、提示者に利用可能な情報量、自己の認識能力についての内省から、Pの真偽を言い切る姿勢に相違があることを指摘している。命題真理は

現象そのものの性質から、提示者の判断能力を越えた外的偶然に支配されていることもある。その場合は事象の生起する確率を真偽に翻訳する [(1b)]。法判断はそのまま語彙化又は文法化されて伝達されるとは限らない。確実と信ずるPを話者は対聴者の配慮から、偽の含みを残すかのように緩和して表出する場合がある。(1c)は、それ故、内部の自己評価を包む“外向け”の法性に当たる。Pが未来時に言及する時、その指示時間での真偽を問題にするが、一つの可能世界 $t_1$ での確実性の評価である故、 $t_1$ と基準時 $t_0$ との懸隔の大小によって判断が左右され、それが真偽の尺度に写し出される。現実世界で、又その延長にある未来時においても偽であるPでも、それが可能になる世界(p.ej. 願望、希望)との観念的な遠近がある程度はPの偽性の強弱に結びつけられ、連動すると推定される [(1d)]。以上のような諸々の判断が同一平面上のスケールとしてとらえられないのは確かである。にもかかわらず話し手は、各々の評価を巧みに一つの同時性の軸(通常は、“非過去” or “過去” 時制に従属させて表現される)に位相転換して、Pに対する「法」の尺度と受け止め、法値及び法カテゴリーに関連づけるものと仮定する。

### 3. 法性提示者と話者

“話者の態度”は古今の叙法の定義に必ずといってもよい程、顔を見せる常套句であるが、その中身はこの言葉が用いられる頻度にふさわしい深さで追求されたことがないように思われる。命題に対して取り得る態度のうち、筆者は最も基本的な真偽判断を法の中心に据えることによって、漠とした“態度”を狭く規定する。一方、「話者」のみが法表現に関与するという見方は余りにも狭弱でスペイン語法性のごく一部しか説明できない。そこで、出口(1980a)で提案した“賛同の原則”にいくらかの修正を加えた形で、法性の提示者と法マーカの連関を明示化しようと試みたのが(2)である。

#### (2) 話者中軸の原則

- (i) 話者P\*の実現において、話者はそのPに対する自らの法判断を法 marker に関連づける。
- (ii) 他者Pの実現において、話者は他者の法判断を引用又は想定して、法マーカに関連づける。
- (iii) 他者Pの法性については、その提示者が文法的に復元可能でなければならない<sup>\*</sup>。

\*N.B.ここで、話者が提示するPを話者Pと呼び、非話者(=他者)が提示するPを他者Pと称し、区別することにする。

具体的な文例をあげながら、上の各項がどのように遵守され又は違反され得るか見て行こう。

(3) Juan cree que María está aquí ,pero se equivoca.

(4) Juan dice que María está aquí, pero no lo creo.

(3)(4)で creer, decir 両動詞の補文は共に Juan のPを実現したもので、Juan が判断すると話者が信じる法概念がINDという法値で現われている。しかし後半節で明らかになるように、話者自身はそのPに対しネガティブな態度をとる。もし話者の法判断が常に従属節の marker に反映され

るのならば、上文の que 補文は“María esté aquí”となるべきであろう。しかし原則第(ii)項の通り、他者Pでは他者の真偽評価が話者のそれを排して尊重される。また法性を付与された命題“María está aquí”は Juan に負うものであることが明示されていて、(iii)に従う。

(5) ? No sabe que Barcelona es la capital de España.

この文には?が付されているが文法上の適格性に関してではない。会話者の間で Barcelona がスペインの首府でないという知識が共有されている場合が普通なので、不適切であることを示すだけである。もし話者によってこのPが真とみなされているのならば、(5)に不自然さはない。ところで従属節は他者のPで、他者がそれを否認するのだから、(ii)に応じて、SUBJ の法値が予想されるのに、IND が出現する。つまり、この文では(ii)は無視され、話者の判断i.e.“P=真”が優先して文法マーカーへ直結すると考える。主文主語、話者以外の特定第3者が“Barcelona es la capital de España”を主張している可能性を完全には否定できないが、(5)は通例(ii)のみに違反していると思われる。

(6) No creo que tiene suficiente dinero.

話者は自己Pに対する法判断を隠して、他者の法性に外形を与えて引用し、(i)に違反することがある。(6)の補文を話者は真であると判定していない。むしろPを真とみなしている他者が存在する筈である。しかし、話者は主文で懷疑を表明するにとどまり、補文の叙法が誰の法性に基くのか明らかにしない。

(7) No cree que la muchacha es bonita.

文(7)は他者Pを表わす節中に話者又は別の他者の法判断が“法の島”を成している例で、(6)の反対である。即ち上文は(ii)に違反しているか、あるいは(ii)(iii)の双方に抵触している。

話者は叙法に関して特恵的地位をもち、文法手段で自らを明示しなくてもその法性を表現できるのが特徴である。例えば、(8)(9)で話者に言及するyo, me, mí, mi などが出現しないにもかかわらず

(8) Serán las diez.

(9) Quizá vengan mañana.

ず、話者の法判断が叙法として顕在する。他方、非話者の法判断が法語彙とその提示者を露にしないで、文中の法 marker となるのは一般的でない。話者中軸の原則(2)の中に第(iii)項が含まれるのはこの理由による。文(6)もすべてのスペイン語話者によって完全に許容されるわけではなく、解釈にも多少の個人差が見られるようである。

しばしば観察される、方言・個人語における法値の揺れは、無意味化した形態素の任意使用の面ばかりでなく、述語そのものの性格が法判断の不安定さを招来するケースもある。動詞 admitir はその種の“両法述語”の一つで IND 補文とも SUBJ 補文とも共起できる。

(10) Admito que (posiblemente)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{lo sabes} \\ \text{lo sepas} \end{array} \right\},$

pero ignoro si en realidad lo sabes.

(Manteca Alonso-Cortés 1976 : 145)

上文(10)の IND の場合、話者の不信を制して他者の法性を受け入れることにより(i)を犯している。しかし接続法“sepas”が用いられる文ではこの違反は起らない。

以上に見た法性投射の種々相は、話者と非話者の法判断が従属節動詞の mood marker と直結しない、どちらかと言えば法実現の周辺に属す事例であった。次に話者が自己の法判断と叙法の係わりを意図的に留保すると見られる叙実節の例を見よう。

(11) El hecho de que tengan tres casas muestra que son ricos. (Lipski 1978 : 932)

文(11)の“tengan tres casas”部分が SUBJ 動詞を含むのは話者の疑念を示そうとするためではなく、このPを他の大きなPの中で、それについて述べる題目として提示し、真偽評価を上位Pに凝集する目的で、むしろ積極的に法判断を差し控えるためではないかと考えられる。では、提題化のため“法抜き”にされる命題が何故、法値 SUBJ を帯びるのであろうか。スペイン語は次のような段階で法カテゴリーを mark することができる。

- |      |    |                  |  |
|------|----|------------------|--|
| (12) | a. | no + INDICATIVE  |  |
|      | b. | no + PRESUMPTIVE |  |
|      | c. | no + SUBJUNCTIVE |  |
|      | d. | SUBJUNCTIVE      |  |
|      | e. | PRESUMPTIVE      |  |
|      | f. | INDICATIVE       |  |

完全な偽Pの(12a)と完全な真Pの(f)の中間にあり、一方の断定に偏らない判断が SUBJ である故、この範疇c,dが“法落し”のために利用されるが最適であろう。拙稿(1981b)で結論づけたように、肯定ほど肯定的でなく、否定ほど否定的でないのがスペイン語の接続法であるからである。直説法は確かに無標の叙法であるが、それは言語表現においてPを真か偽か単純に言い切るのが当たり前であるという語用面に支えられている。真からも偽からも引き離すという目的には反するので、IND は提題の法に用いられないのである。いわゆる評価節 es natural que ,es bueno que, es lógico que などの叙法選択にも同様な原理が働いている。しかし、(11)の類型を始めとして、el que,de ahí que,esto (eso) de que,así se explica que 等の叙実節に IND も任意的に使用される事実は、この factivity,つまり明確な真偽の前提が話者に直説法を要請するためであると説明できる。

## II

### 1. 不定詞と法

一時期の規範文法で不定詞が“不定法”と称され、あたかも直説法・接続法・命令法と対立する一種の法範疇であるかのように取り扱われたことがあった<sup>13)</sup>しかし、その場合の“modo”は本稿の定義とは全く異質な、むしろ動詞屈折パラダイムの形態分類に照準を合わせたものであった。その後、不定詞は動詞の非人称形だとする見方や語尾の-rを complementizer の一種とみな

す考え方が支配的となっている。明らかに不定詞は IND, SUBJ と対立するような法マーカーを持たない。しかし、一般に信じられているように不定詞の形成過程に「法」は全く無縁なのであろうか。本章§1は、たとえそれが法 marker として顕在化しなくても不定詞の基底にある命題に対しても法判断が存在するだけでなく、文法のどこかでその法性を組み込まなければならないという考察を明らかにする。

文(13)で不定詞 *creer* は *es difícil* の主語補文であるが、主節述語に含まれる弱い否定の含意(“困難” → “～でない可能性がある”)が命題 PRO CREER X に偽性の陰を与える。

(13) *Es difícil creer que haya un hombre que necesite tantos libros.*

その結果、*creer* の目的節も法性が陰否的となって、内部に含まれる関係節にも SUBJ が出現する。不定詞の背後にある命題が法に関し完全な白紙の状態であると仮定すると、接続法形 *haya* は *es difícil* によって誘発されたと見る他仕方がない。ところが、*haber un hombre* 節と頂位文 *ser difícil* の間には統語上も意味的にも直接の従属関係がない。両構造を連結し、前者の叙法を導き出すには *creer* に法性を認め、それ中継して順次下位文に法判断が波及していくと考える方が *ad hoc* でないであろう。

(14) *Puede ser que vengan mañana.*

上文(14)で補文動詞の叙法選択は、一般に言われているように、上位の *puede ser* 全体を“見て”行なわれたのではなく、直上位節 *ser* のみを走査すると考えたい。“*vengan*”は *ser* に付与された法カテゴリーが (12d) の SUBJ に相当するものであることに由来する。一方 *ser* は上位の  *poder* の語彙意味によって、ここでは一時的に SUBJ 的法性に染まっていると言えよう<sup>24</sup>

不定詞が基底構造において主語・時制をもつ文であるという分析に立って、不定詞の形成が論議される時、「法」が引き合いに出されることはまず無かった。専ら関心が注がれたのは、削除される補文主語 NP とそれをコントロールする上位節内の先行詞との関係であった。仮に、主語が消え同時に *tense* が削られる時、補文標識 *r* が挿入されるとして、その際、動詞の法性は全く問題にならないのであろうか。前掲の文タイプを扱う上で、不定詞形導入以前の段階ですべての動詞は法に関して範疇化されていると見る方が好都合である。支配動詞の種類によって補文主語が強力に規制され、又 *tense* の回復が容易な場合にのみ、時制と不可分な法標識も表に出ず、潜行するとも考えられる。しかし不定詞が表層において“無法”であるのは、このように主語 NP、時制側の事情から生じた副産物なのであろうか。言い換えれば、不定詞文のより深い構造の一部にある筈の法性は「不定詞形成」の過程に何の役割も演じてないのであろうか。本稿はこの疑問の一部に答えるため、具体的に不定詞が使用される多種多様な環境で、その根底にある法概念をまず調査することにした。

## 2. 不定詞の法性

### 2.1. 資料

Corpus を選定するにあたっては、現代スペイン語の平均像が得られるのが望ましいと考え、

口語会話体、各種スタイルの文語を取り混ぜ、次の8ヶ所から採った。#2と#8はそれぞれメキシコ及びベネズエラのスペイン語であるが、不定詞の使用において特に地域差が著しいという予測は持たなかったため、各方言の小 sample をとって平均化するという配慮を払っていない。

(15) Corpus

1. Criado de Val, M. “Transcripciones coloquiales” —YELMO 18(1974), 6—15  
3人の大学寮生（スペイン女性）と記録者との会話
2. (Lope Blanch, J.) “El habla popular de la Ciudad de México” UNAM 1976, 94—97; 52—55  
記録者と informant の対話。メキシコ生れ中年男女各一名
3. Forest, E. “Diario y cartas desde la cárcel” HORDAGO, Donostia, 1977. 17—20, 66—69  
母親から子供達に宛てた書翰風の日記
4. Tamames, R. “Historia de Elio” Ed. PLANETA, 1976. 181—185, 240—244  
小説。会話部分もあり、テーマは政治問題
5. López Salinas, A. “La mina” Ed. DESTINO, Barcelona 1969. 87—89, 195—198  
小説。鉱夫の家庭、切羽での会話が含まれる
6. *La Voz de Galicia*. Domingo 4—enero 1981  
新聞。雑多な三面事件記事
7. Goytisolo, J. “Menéndez Pidal y el padre Las Casas” —Obras Completas II, AGUILAR, Madrid 1978. 992—997, 1005—1010  
評論。歴史上の人物をめぐる評価に対する批判
8. D’Introno, F. “Sintaxis transformacional del español” Ed. CATEDRA, Madrid 1979. 72—83, 261—263  
論考。虚飾のない実務的文体による文法議論

2.2. 法性の区分

上記資料に現われる全不定詞形を直説法的環境、推定法的環境、接続法的環境に3大別してその頻度を調べるのが第一の目的である。問題の不定詞を取巻く法概念がどれであるかの決定は、仮に支配動詞が que 節をとるとすれば、通常どの法値を示すかによって判断した。例えば querer に後続する不定詞の法性は SUBJ と判定される。mandar, aconsejar, hacer, dejar, necesitar も同様に法性〔+subj〕を含む不定詞と組む。他方, consistir en, soñar en, manifestar, etc. の表現は que 節を従えた場合 IND を選ぶので、不定詞補文の法環境を直説法的とする。上のような基準が役立たない時、i. e. 決して定形節と相容れない構造は、それに近接する意味の他の語彙と法マーカ―の結びつきを考慮して、前記3値のいずれかへ分類することにした。`義務`を表わ



す deber の後の不定詞は necesitar, hacer falta と類似概念であるという理由で SUBJ に入れる。又、推定の意味解釈で用いられた deber (de) は推定法の法概念にパラレルであることから支配下の不定詞は PRES の法性に染まっているとみなす。同様に、未来、指向の迂言法 ir + inf は、que 節に置換不能だが、その機能に推定法との類似性が認められるので PRES 的不定詞に指定する。ただし前置詞“a”が明確な目的を意味し、“ir”も移動の原意を捨てていない時は、para の後の不定詞と同じく、SUBJ の法性を有すと解釈した。相動詞と称される acabar de, empezar a, etc も que 節を従えることがないので法 marker との平行性を拠り所とするすべがないまま、一応、直説法的な法環境とみなした。haber de は義務、の意では後続不定詞が SUBJ 的で、予定・未来に近い時は推定法性を帯び、2 法性のいずれとも組み得る。主節との同時接続に多用される al + inf では、cuando + subj に相当する環境で SUBJ に数え、その他の不定詞は IND 的と見る予定であったが、前者に該当する事例は Corpus の中に一例も発見されなかった。尚、否定の存在が叙法に影響を与える構造では不定詞を包む実際の環境に neg があるかに即して、法性を解釈した。以下、不定詞を支配する上位節の各種表現のうち、資料に発見された主要なものを、法性区分別に掲げる。

(16)

## A. 接続法的

poder, querer, esperar, hacer, dejar, lograr, conseguir, intentar, convenir, gustar, preferir, necesitar, permitir, ordenar, tener que, haber que, deber, haber de, dejar de, tratar de, hacer falta, aspirar a, ser difícil, ser emocionante, ser posible, ser malo, ser necesario, posibilidad de, penita de, ávido de, hora de, opción de, urgencia de, suerte de, necesidad de, para, antes de, sin, cómo, qué<sup>15</sup>

## B. 推定法的

ir a, pasar a, deber (de), haber de, parecer

## C. 直説法的

acabar de, terminar de, empezar a, volver a, soñar en, consistir en, tardar en, soler, luego de, después de, además de, por (理由), de (条件), al

## 2.3. 法マーカーと不定詞法性の頻度

テキストに現われる動詞定形、不定詞、現在分詞を抽出し、その度数をまず数えた。独立的に使用される過去分詞も別に数え出したが、以下の集計では省略する。また複合時制では haber 形のみが度数の対象となり、過去分詞は無視されている。

(表 I)

定形	不定詞	現在分詞	動詞形総数
3,002	717	136	3,855
77.9%	18.6%	3.5%	100%

上表は定形、不定詞、現在分詞の出現度数と動詞総数に対する比率を示す。次に従属節動詞のみに注目して比較したのが表Ⅱである。

(表Ⅱ)

定 形	不定詞	現在分詞	従属動詞
1,008 54.2%	717 38.5%	136 7.3%	1,861

不定詞はここでは38.5%というかなり大きな割合を占めている。定形動詞の法標識の頻度を主節、従属節別に集計すると次のようになる。

(表Ⅲ) 法標識の分布<sup>26</sup>

	IND	PRES	SUBJ	合 計
主 節	1,716 86.0%	130 6.5%	148 7.4%	1,994
従属節	815 80.9%	48 4.7%	145 14.4%	1,008
全 体	2,531 84.3%	178 5.9%	293 9.8%	3,002

上表から、主節でも従属節でも直説法が8割を越えていて、“直説法＝無標のモード”は実際の運用数値面からも強い裏付けを得ることができる。従属節での SUBJ 出現率は、主節の倍近いが、法性の側から見ると、接続法 marker が主節に出るか従属節に出るかは5分5分である。しかし、重要なのは従属節においてさえ、SUBJ は無標の、つまりごく普通に出現する法形ではなく、IND の数分の一に過ぎない頻度である事実である。表Ⅲの数値に見る限り、直説法は主節の法である、は未だしも、接続法は従属節の法である、という単純化は全く失当であろう。なお上表の SUBJ の中には、いわゆる「命令法」の動詞形、v. g. ama, amad 及び命令文に使用される接続法現在 ame, amen, amemos, ames, améis が含まれている。法値の一つに「命令法」を指定しないのは、それらの語形が法性において SUBJ と変わらず、命令の ama, amad と接続法諸形の分布は統語・形態論のレベルで相補的に規定できるからである。

次に不定詞の基底にある構文の法性別に頻度を比べたのが表Ⅳである。

(表Ⅳ) 不定詞の法性

IND	PRES	SUBJ	合 計
82 11.4%	71 9.9%	564 78.7%	717

不定詞形の現われる法環境は SUBJ が断然優勢で、従属節の定形動詞における法マーカの比率ときわだった対照を見せる点は特に注目すべきである。表 V は従属節の法性が直説法的か非直説法的かという基準に絞って、定動詞と不定詞を比較している。

(表 V)

	IND	Non-IND	合 計
定 形	815 80.9%	193 19.1%	1,008
不定詞	82 11.4%	635 88.6%	717

従属節の法分布において、定形の 8 割以上が IND で用いられるのに対し、不定詞のベースにある命題の法は、逆に、9 割近く非直説法的であるのは全く偶然と言い切れるだろうか。従属構文として表層化する命題が従属の統語タイプにより一方の法性に強く傾斜しているという現象は、更に表 VI から確認することができる。即ち、従属命題の全体を見れば、直説法にふさわしいものとそうでないものはほぼ互角の数値 (897:828) を示している。

(表 VI) 従属文命題の法性とその実現タイプ

A.

	計	定 形	不定詞
IND	897	815 90.1%	82 9.1%
Non-IND	828	193 23.3%	635 76.7%
合 計	1,725	1,008	717

B.

SUBJ	709	145 20.6%	564 79.5%
Non-SUBJ	1,016	863 84.9%	153 15.1%
合 計	1,725	1,008	717

命題法性の側から見ると、直説法的法判断を含む命題の 90% が定形従属節として現われるのに対し、不定詞に実現されるのは 1 割に満たない。また非直説法は 1/3 以上が不定詞形で出現し、定動詞の法 marker を具現するのは 1/3 程度であることがわかる [cf. 表 VIA]。表 VIB 表は法値の二分法を接続法 VS 非接続法にとって比較しているが、ほぼ同様な傾向がうかがわれる。

法標識・法性の分布や頻度がテキストの種類・文体により異なり得るのは当然で、今回の調査

でも、出所別の数値にかなりのバラツキがあった。しかし、そのような変異を比較吟味するには各テキストの調査量が少な過ぎ、又その目的にふさわしい厳密な手順で調査対象や抽出個所を選択していないので、ここでは個別の data を検討しない。ただ不定詞の法性頻度については、参考のため Corpus (15) のテキスト別の集計表をあげる。

(表Ⅶ) 不定詞法性頻度の内分け

テキスト	IND	PRES	SUBJ	計
# 1	13	20	72	105
# 2	12	6	93	111
# 3	15	6	86	107
# 4	14	2	35	51
# 5	22	4	30	56
# 6	8	7	60	75
# 7	9	2	77	88
# 8	7	6	111	124
合 計	82	71	564	717

従属節中の法マーカーの分布はその節の種類によって多少差があることは、次表Ⅷの下位区分でわかる。ここで補文と分類されているのは、主節に対し主語又は直接目的語の関係に立つ que 節を指し、「その他の節」は a, de, por, en, con などで先導される節を含む他の従属節のことである。

(表Ⅷ) 定形従属節の種類と法 marker

	IND	PRES	SUBJ	計
補 文	167 68.2%	18 7.3%	60 24.5%	245
その他の節	263 77.6%	14 4.1%	62 18.3%	339
関係節	385 90.8%	16 3.8%	23 5.4%	424
合 計	815 80.9%	48 4.7%	145 14.4%	1,008

#### 2.4. 不定詞は法に対し無色か

前節の統計は不定詞構文の下地となる命題の法性は SUBJ marker に相当するケースが断然優位を占めることを示している。従属節全体の命題法性に関し、直説法 VS 非直説法の割合はほぼ半々である (cf. 表ⅥA) ことを考え合せば、このような数字の片寄りは偶然のいたずらとみるには大き過ぎる。不定詞に含まれる *-r* が純粹に補文を導くための標識であり、又、主語を削除され時制を失った動詞がすべて等しく不定詞になり得るのだとすれば、不定詞の法性と全従

属節の法性分布は比例している筈である。そこで、従来の分析で常識となっている“不定詞に法はない、不定詞は法と無関係である”という暗黙の前提に疑問を投げかけざるを得なくなる。不定詞形を法の埒外にある“無主語動詞形”とみなす形式的アプローチから一步踏み出し、筆者は-r形自身に非直説法となじみ易い固有の法的体質を認めたいと思う。換言すれば、不定詞形が選ばれる要因の一つに、上位構造の語彙意味とも関連した法性も考慮され得るのではないかということである。勿論、不定詞が叙法を mark すると主張するのでなく、その背後にある法環境が陰否的であって、もし主語・時制の明示が必要ならば、接続法形動詞で現われるような法性が陰在する傾向が強力である点を指摘している。

不定詞が非直説法のムードの上に生起し易いと仮定することによって、その独立的な用法における含意や法概念をうまく説明できる。

(17) a. ¿Por qué pintas la casa de (color) púrpura?

b. ¿Por qué pintar la casa de (color) púrpura?

(Sánchez de Zavala 1976:388~9)

直説法形動詞を含む文(17a)は平常の質問行為として発せられる他、“家を紫色に塗るべきでない”という間接的な示唆にも用いられる。ところが不定詞 pintar と疑問詞を直結した(b)文では、後者の“弱い諫止あるいは制止”の発語内行為とのみ結びつくという。法マーカーを欠くこのような独立不定詞に接続法概念が付随し、直説法性が欠けるのは、上述の分析に従えば極めて自然なことである。

不定詞はしばしば先行文に間髪を入れず挑戦する調子で話者側の強い反応として用いられる。

(18) -¡Tú te arrepentirás!

-¡Arrepentirme! (Volková 1971:68)

(18)の不定詞文は明らかに応答命題に対する否定的態度を打ち出している。不定詞のこのような使用は文脈とその発話にかぶせられる特殊なイントネーションによって指示されるのであって、不定詞 marker -rは何の役割も演じていないという反論がなされるかも知れない。上例でarrepentirmeが異議申立てとして解釈されるのは、専らコンテキストと音調に負うのであれば、不定詞はどのようなタイプの発話行為にも相容れてしかるべきである。例えば(19)の質問において時制、主語は余剩的情報である故、平板な断定文の抑揚と強勢をもつ不定詞で答えられるべきであろうが、(19)の答えは奇妙である<sup>17</sup>。

(19) -¿Te arrepientes?

-Sí,\*arrepentirme.

この事実は不定詞が環境によって様々な法に染まると述べるだけでは解決しない。不定詞には元々特定の法に染まり易い素地があると仮定して始めて説明がつくのではなからうか。前出(8)で、そこに付随するイントネーションが一種の法表現であり、もし語彙化されたならば従属節にSUBJを惹起させるであろうものに相当すると認められる。

Bolinger (1967 : 52~54) は明示主語を判う不定詞のシンタクシスについて興味深い観察を行っている。主語つき不定詞は通常の que 補文の位置に現われると許容されにくい。

- ⑳ a. \*Sería imposible hacerlo él.  
b. Hacerlo él sería imposible.  
c. \*Hacerlo él sería posible.

しかし不定詞が動詞前位に置かれる時、述語が否定的内容の(b)文は肯定的な(c)文より許容度が高いと判断されるという。彼は(20b)を(21)のように、2つの部分が合成されたものと解釈する。

- ㉑) ¿Hacerlo él?—sería imposible.

前半は話者が信じ難いとみなす命題で、独立の反応として¿Hacerlo él?と聞き返し得る内容でなければならず、後半の imposible とは両立する。ところが(20c)は話者の不信を含意する前半と後半 sería posible とでは矛盾をはらむため受け入れられにくいと考えられる。<sup>18</sup> Bolinger 自身も気づいているとおり、主文に neg があるか否かの統語的問題ではないことは㉑㉒㉓の例からも明らかである。

- ㉒) Decir eso yo parecería una ofensa. (Bolinger 1967 : 54)

- ㉓) Casarte tú fue una tontería. (Ruiz-Morales 1979 : 13)

主語不定詞節は独立して“不信”の聞き返しになり得る内容で、主文述語はその命題に対する否定的判断を含む評言であるが、形式上の否定は存在しない。

主語の出ない下記の類例を含めて、この種の不定詞の出現は、不定詞に対して非直説法的素地を認めることにより明快単純な説明が与えられるであろう。

- ㉔) —¿Cómo es que por fin te has decidido?

—¿Decidirme? ¿A qué?

- ㉕) —¿A usted se le para el corazón?

—Pararse, lo que se dice pararse; no. 上例2文 (Dubský 1966 : 1)

文(26b)のような主語→主語繰り上げ構文とこの操作を受けていない(a)文との意味の相違がしばしば話題にのぼる。

- ㉖)a. Parece que el presidente  $\left\{ \begin{array}{l} \text{es} \\ \text{sea} \end{array} \right\}$  tonto.

b. El presidente parece ser tonto. (Lleó 1978 : 88)

Sauer の洞察によると、que 節を含む構文は両義で、主張的な“・・・のようだ”の解釈と“・・・に見える(が実はそうでない)=aparentar”の意味を持つ。ところが Subject to Subject Raising のかかった構造は一義的で、後者の非主張的解釈のみが可能である。

- ㉗) Angela parece ser culpable  $\left\{ \begin{array}{l} \text{pero no lo es.} \\ \text{*y por eso merece ser ahorcada.} \end{array} \right.$

(Sauer 1972 : 118)

このような対照が補文タイプに認められるのならば、不定詞補文の根底には話者の否定的判断が隠されている点で、ここでもやはり不定詞は非直説法的法性と強い結合性を持つと言えそうである。しかし、この事実でもって (26b) の不定詞文が(a)文の接続法動詞を含む文にのみ関連づけられる (cf. Lleó 1978 : note 1) とまで速断できないだろう<sup>註9</sup>

最後に不定詞の命令用法に触れなければならない。

(28) ¡ Venir!

(29) ¡ No correr tanto!

(30) ¡ A trabajar!

なぜ不定詞が単独で「命令」の発語内力を持って使用されるのか、その理由はこれまで納得のいく解明がなされなかったように思われる。不定詞は命令文といくつかの統語的特徴を共有することを拙稿 (1979) で明確にし、両者が歩調を揃える基盤は“無時制”にあると分析した (cf. p.24. 註13). 統語上の tenseless は一つの要因だがそれだけでは十分な説明になっていないのは、現在分詞、過去分詞が自然な命令形式に転用されにくい事実を思い起せば明らかである。非直説法的な法性が不定詞の本来好む法的環境であるとする、小論で提案する仮説に従えば、不定詞と「命令」カテゴリーの結合力の大きさは当然の結果である。言うまでもなく接続法こそが unmarked な統語命令文に使用され、命令行為に最適の叙法であるからである。

(1981年 8 月10日)

#### [注]

\* 本稿は下記で筆者が行った 2 篇の研究発表を文章にまとめたものである。

“法性の一表現としてのスペイン語法マーカーについて” 第53回関西スペイン語研究会、1980年10月25日於大阪外国語大学  
“叙法の裏表：スペイン語不定詞の法の裏側” 1981年7月28日第一回スペイン語研究セミナー、於関西地区大学セミナーハウス

特に後者の機会はスペイン語叙法を統一研究テーマとし開かれたもので、多くの参加者による活発な議論を通じ有益な示唆を受けた。

1. 「推定法」を認める理由と根拠については出口 (1980 b, 1981 a) を参照されたい。
2. Se cree que María está allí のような場合でも、se+動詞 3 sg, でPの提示者は復元されると見なす。
3. 伝統文法の新派の中にもこのような用語法が受け継がれている。例えば Molho (1975 : 706) は不定詞を“準名詞法” modo casi nominal と呼んでいる。
4. ser difícil que, puede que 等の構文も可能で補文に SUBJ 形が要求される。この場合、que 節の前にあるべき不定詞が削除されているのであって、これらの表現が元来、接続法と共起するから difícil と que; 又は puede と que の間に不定詞を挿入した文(1304)が SUBJ を支配するのではない。
5. 疑問詞・関係詞に直統する不定詞には一種の法性が内包されることは以前から指摘されているが、ここではそれを弱い「義務」と解釈して、SUBJ に含めている。
6. 不定詞の背後に潜む法性を計数的に調べた資料は、筆者の知る範囲では、これまでに報告されていない。時制・法標識の頻度については大きな corpus を調査した data が利用できる、以下に 2 種の統計を筆者のものと比較する。いずれも、時制・法を本稿の分類基準に組み変えて集計し直した数値である。また Bull (1947) で示されている調査のうち、散文

完全テキストの約10万語形の頻度を引用する。

a. 語形分布

	定 形	不定詞	現在分詞	動詞総数
Bull (1947)	75,971 76.0%	19,907 19.9%	4,110 4.1%	99,988*
Rolfe (1968)	37,481 77.4%	9,065 18.7%	1,883 3.9%	48,429
本 稿	3,002 77.9%	717 18.6%	136 3.5%	3,889

b. 法標識の頻度

	IND	PRES	SUBJ	計
Bull (1947)	63,811 84.0%	4,063 5.3%	8,099 10.7%	75,971
Rolfe (1968)	30,990 82.7%	2,128 5.7%	4,363** 11.6%	37,481
本 稿	2,531 84.3%	178 5.9%	293 9.8%	3,002

\*接続法未来形（3例）はこの表から除外した。

\*\*この数字中に接続法未来形が含まれている可能性があるが無視する。

7. ¿qué haces?やそれに類する質問には不定詞で即答できる（cf. Dubský 1966）が、この時、不定詞は直説法的な法力または無法で用いられているかも知れない。

p.ej. —¿Qué está haciendo?

—Lavar.

8. 主語を伴わない、即座の異議・疑義の表明に関しては ser posible が含む陰否性だけで不定詞を可能にするのに十分である。

—Como si te hubieran cambiado.

—¿Cambiarne? Sí, Eso sí es posible. (Dubský 1966 : 1)

9. Ruiz-Morales は次例をあげて、Sauer の指摘に反論している。

Angela parece ser la culpable, y por eso la vamos a expulsar.

だが assertive/non-assertive という割り切り方に疑問を呈しているだけで、真理値に関する不確かさの程度に関連する事実は認めているようにとれる（Ruiz-Morales 1979 : 68）。

## REFERENCES

- Bolinger, Dwight (1967) : Apparent constituents in surface structure. - *Word* 23, 47-56  
 Bull, William E. (1947) : Modern Spanish verb-form frequencies. - *Hispania* 30, 451-66  
 出口厚実 (1979) : 動詞の内部構造と付接辞嵌入について - *Estudios Hispánicos* 6, 19-32  
 — (1980 a) : 法性の一表現としてのスペイン語法マーカーについて. 第53回関西スペイン語研究会  
 — (1980 b) : Mood, Modal and Tense in Spanish. - *Linguística Hispánica* 3, 87-101  
 — (1981 a) : ムードとモード：スペイン語における法性をめぐって - *Estudios Hispánicos* 7, 59-71  
 — (1981 b) : 接続法と陰否性：スペイン語叙法分析の一視点 - 大阪外国語大学報 52, 19-37



Dubský, Josef (1966) : El infinitivo en la réplica.-*Español Actual* 8,1-2

Lipski, John M.(1978) : Subjunctive as fact? -*Hispania* 61, 931-34

Lleó, Concepción Pujol(1978) : Some optionl rules in Spanish complementation. Ph.D. dissertation.

University of Washington

Manteca Alonso-Cortés, Angel(1976) : Notas sobre la presuposición en castellano.-*Estudios de gramática generativa*. (ed.)

Víctor Sánchez de Zavala., 143-49

Molho, Mauricio(1975) : Sistemática del verbo español. Gredos. Madrid. 2 Vols.

Rolfe, Oliver W.(1968) : Grammatical frequency and language teaching : Verbal categories in French and Spanish. -*Word*

24, 410-17

Ruiz-Morales, Hildebrando(1979) : Infinitives and patterns of sentential complements in Spanish. Ph.D. dissertation, Indiana University.

Sauer, Keith Edward (1972) : Sentential complementation in Spanish. Ph.D. dissertation, University of Washington

Volková, Bronislava (1971) : Emotively motivated repetition and its functions- *Philologica Pragensia* 14/2, 65-78